

(西暦) 2018 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

脳卒中入院患者の退院後生活の認識に関わる要因とその変容プロセス
～TEA の分析から～

学位の種類: 修士 (作業療法学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 17896601

氏名: 相原 彩香

(指導教員名: 谷村 厚子准教授)

【はじめに】かつて我が国の三大死亡原因の一つであった脳卒中の生存率は、近年の医療技術の発展により上昇しており、多くの脳卒中患者が様々な障害を抱えながら生活を継続する状況にある。そのため、回復期リハビリテーション病院において退院後生活設計の支援を行う上で、脳卒中患者の退院後生活の認識を理解することは重要となってくる。しかし、回復期リハビリテーション病棟に入院中の脳卒中患者が退院後生活をどのように捉え、それらがどのように変容していくかといったプロセスを検討した研究は見当たらない。そこで本研究の目的を、回復期リハビリテーション病棟に入院中の脳卒中患者を対象に退院後生活の認識の変容プロセスとそれに関する要因を明らかにすることとした。

【方法】本研究の分析には、複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) を用いた。対象者を回復期リハビリテーション病院に入院する初発脳卒中患者とし、4±1 名を目安に募集した。1 名につき半構造化インタビューを 3 回実施し、聴取した退院後生活に関する考えを可視化した複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: 以下 TEM) 図を作成した。全回とも退院後生活の認識やその際の周囲環境からの影響についても聴取した。データの統合は全対象者の TEM 図から出来事や行動、思いに関するラベルを抽出し、抽象度を上げたラベルを時間の流れに沿って並べた。ラベルの表現や個々人の経験を十分に追えているか、繰り返しデータ内容と比較しながら統合を進めた。

【結果】対象者は男性 2 名、女性 1 名の計 3 名であった。分析の結果〈①病前に関わりのある人との距離を置く〉〈②希望の退院後生活に足りないものに気づく〉〈③希望の生活のために出来る事・難しい事との折り合いをつける〉の 3 つの分岐点を抽出し、最終的に《退院後生活を自分らしく過ごすために努力をし続ける》という等至点に至った。促進的記号として“自分らしい生活を徐々に形づくる経験”“障害と共存した新たな自分の価値を見出す”が抽出し、価値・信念として“社会的相互作用における役割への価値を持ち続ける”が発生していた。

【考察】本研究の結果より、心身機能の回復の経過において脳卒中患者は、障害と共存した新たな自分の価値を見出すと共に家族・友人・仕事の関係者などの社会的役割との繋がりを持つことが示された。よって、脳卒中患者の自分らしい退院後生活の構築を支援するためには、心身機能の経過や環境、病院内・外との関わりの変化、社会的相互作用における役割への価値の持ち方などを日々の関わりから丁寧に捉え、これらを理解した上で患者とチームで共通した目標を持つ重要性が示唆された。